
そして闇に消ゆ

かやしまみづき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして闇に消ゆ

【Nコード】

N9130H

【作者名】

かやしまみづき

【あらすじ】

そのお祭りは狐の面をつけていかないと、良くない狐に連れていかれてしまう。だから、つけないでいこうと思うんだ。高校一年生の、夏休みの記録。

第壱話 爆発

学校から帰ってくるなり、あたしは家中のありとあらゆる物を破壊した。

食器棚が倒れて中の食器の破片が飛び散る。

テーブルをひっくり返して飲みかけだったコーヒーがこぼれる。

コンセントを引きちぎってテレビを床に叩き付ける。

それから、その場にうずくまって大声で泣き叫んだ。

母は蒼ざめた表情で見ているだけだった。

その頃のあたしは、無理矢理入れられた有名進学校も、上辺だけの友達ごっこも、厳しい教師も、退屈な授業も、大嫌いだった。

どうせ自分が選んだ人生じゃないから。そう思うとどんどん卑屈になっていった。表情が死んでいくのが自分でも分かる。

そしてついに今日、鬱積したものが爆発したのだ。

高校に入学して二週間と三日。あたしの許容量は思ってたよりずっと少なかったみたい。

母は暴走するあたしが相当怖かったらしく、あれ以来話しかけようとするとかなり怯えられる。

その度にあたしは心の中でごめんねって謝る。別に母が嫌いなわけじゃないんだ。

少し、頭を冷やしたいと思った。

だから、夏休みはおばあちゃんの家で過ごしたいって言うてみた。何度か泊まりに行った事はあったけど、一ヶ月も泊まるのは初めて。

ほぼ毎日学校の課外授業が入ってた気がするけど、そんなの知らない。

現実から、逃げたかっただけなのかもしれない。

母は「そうね、それがいいわ!」と必死に肯定した。泣きたくな
った。

第貳話 伝承

電車を乗り継いで三時間と少し。駅に着くとセミがうるさく自己主張していて、余計体力を奪われた気がした。

手に持っていたお土産が重くて、傍らにあったベンチを軽く蹴った。

それからバスで四十分。更に歩いて十五分。不便すぎる。

どうして田舎ってこんなに坂が多いんだろう。

馬鹿みたいに長い斜面をのぼりきると、やっと目的地が見えた。

純日本風の古い家。広い庭には蔵なんかがあったりする。

「あらゝ、いらっしゃい。よく来たねえ」

祖母は庭に柄杓で打ち水をしていた。太陽の光が反射して眩しい。

こんなあたしが、こんな明るい場所に居ていいんだろうか。罪悪感がこみ上げてくる。

「八月十三日に、稲荷神社でお祭りがあるのよ。行ってきたら？」

菜月ちゃんなつきこっちのお祭りは初めてでしょ？」

おばあちゃんはそう言って、夕食後にあたしが持ってきた水ようかんを出してくれた。

開け放した縁側の窓から涼しい風が入ってくる。都会とは大違い。

「そだね。浴衣着ようかなあ」

「そのお祭りね、必ず狐のお面を付けていないといけないって決まりがあるの」

「何で？」

「じゃないと良くない狐に連れて行かれちゃうって伝説があるのよ」

「へえ、不思議だね」

田舎の伝承は突飛なものが多い気がする。だって河童が出てきたり天狗が襲ってくるなんて現実起こるわけないし。

だけど、おばあちゃんのこの話はあたしの関心を強く惹きつけた。

第参話 神社

次の日の朝食後、ふと思いついて神社に行ってみる事にした。他にしたい事なんて何もないんだし。

「暑……」

外へ出ると熱風に体を包まれる。それでもアスファルトの照り返しがないから、東京よりは幾分かマシな気がした。

おばあちゃんに描いてもらった地図を頼りに、迷いながらもやつと神社までたどり着いた。

が、私を迎えたのは境内ではなく。ゆうに百段はあるであろう長い石畳の階段だった。痩せそう。でなくて。

まだギリギリ午前中とはいえ、日差しは強い。一瞬帰ろうかとも思ったけど、せっかくここまで来たんだし、しょうがなくなるべく日陰を通ってのぼってみた。

「長かった……」

のぼりきると、妙な達成感を感じた。

少し立ち止まって呼吸を整えてから、敷地内の玉砂利を蹴散らして境内に向かう。

とりあえずお願いでもしようと、賽銭箱に五円玉を投げ込む。さすがに五円は少ないと思ったけど、他は全部諭吉さんだったから、神様には低賃金労働してもらおう事にする。

でも、お願い事が何も思い浮かばなくて、結局何も頼まないで賽銭箱から離れた。

だってあたしの望みなんて、どうしたって叶うわけがない。

境内の裏に回ってみると狐の石像があって、その周りには彼岸花が沢山供えられていた。狐の目には水晶のような透明な石が埋め込

まれ、尻尾が九本ある。

何故かあたしはしばらくその狐に見入っていた。

「ねえ」

「！」

突然誰かに声をかけられ、この暑い中あたしは一瞬凍りついた。

振り向くと、後ろに小六ぐらいの男の子が立っていた。いつの間に来たんだらう。砂利の音、したっけ？

「な、に？」

辛うじてそれだけ答える事ができた。

「何でお願いしないの？」

「え」

「せっかくお賽銭入れたのに」

細身で色白、漆黒の髪をした少年は、病弱そうで夏には酷く不釣り合いだと思った。

それが少年の違和感を助長させていて、変な気分だった。

「し、したよ……」

やだな。他人と話すなんて何週間ぶりだろ。

「何て？」

「……っ」

さっきよりも強く、心臓に、衝撃が走る。

どうして、何も願ってない事がわかったの？

何か言葉を口にしようとして顔を上げると、少年は居なくなっていた。

気味悪くなって、私は逃げるように神社を後にした。

第肆話 喪失

八月十三日。お祭り当日。遠くから太鼓の音が微かに聞こえて、五時ごろ目が覚めた。

一階に行くと、祖母はもう起きていたらしく、誰かと電話してた。「でもねえさつき、こっちに転校なんて……。あんなに有名な学校に入れられたって喜んでたじゃない。それじゃあ菜月ちゃんが可哀想よ」

さつき……母の名前だった。

私は静かに二階に引き返して、部屋の布団に深く沈んだ。頭を強く殴られたような感じがして、心臓の音がうるさかった。

「あたしの学歴なんて、もうどこでもいいんだ」

それから一時間後に、私は表情を隠して一階へと降りた。

「おはよう」

笑って言う。

「おはよう。早いのねえ」

おばあちゃんも笑って言う。幾分か哀れみを持った微笑みで。

夕方、浴衣を着せてもらって、六時ごろ家を出た。

「おばあちゃんに行かないの？」

「年寄りには人混みが苦手だねえ」

私も、嫌いだよ。でも今日だけは……。

「あ、菜月ちゃん。はい、お面」

別にいらないのに。

「ありがとうございます。じゃあ行ってきます」

すぐに屋台のある方へは向かわず、人気の無い公園のベンチに座った。

今朝の出来事が頭の中でループする。私なんか、もう要らないん

だね？

一般的な模範解答が転がってるだけで、ほんとに正解なんて誰も知らないんだ。少数を『異常』として排除する大衆。『普通』以外は間違いなんだって。

だったら、こんな間違ったあたしなんか、

「イラナイ」

絶望して涙すら出ない。

ただ感情が欠落したまま、誰かが迎えに来てくれるのをひたすら待った。誰も来てくれない事なんてとくに知ってるはずなのにね。ベンチのささくれ立った木の部分が手に刺さって、紅い液体が傍らにある狐のお面に染みを作る。一瞬それが涙に見えた気がした。

絶対的な存在を無くしたあたしは、これからどう生きていけばいい？

第五話 あか

「お面してないと、連れていかれちゃうよ」

その聞いた事のある声に、あたしは何故か安堵を覚えた。あの時の少年だった。

「どこに」

「さあね」

誰だって、なんだって、どこだってよかったんだ。

この腐った世界から連れ出してくれるなら。

どこまでも続くあかいあかい提灯。全ての光が消された今は、屋台の光と提灯の灯りだけが頼りだ。

会場を抜けるとそれさえもまばらになる。

あたしが持つのは、少年にもらった、血を吸ったようにあかいあかい彼岸花。

「献花をしないと、白狐様に怒られるからね」

その花を持っているせいか、周りにはあらゆる魍魎魍魎が見える。昔見た妖怪百鬼夜行絵巻に似ていた。

しばらく歩くと、行く先にはずらりと並んだあかい提灯が、風もないのに揺らめいていた。

あかい鳥居が何千何百も見えて、その鳥居と鳥居の間から、幾つもの白い手が不気味に手招きしている。

下にはなだらかな石段。稲荷神社のそれではない。

少年の後について一歩踏み出した、時。

「菜月ちゃん！」

ゆっくり振り向くと、おばあちゃんが血のついた狐のお面を持って、息を切らしながら立っていた。

「行っちゃ駄目！」

「何で？」

「……っ」

おばあちゃんは絶望した顔ではらはらと涙を流した。

何でこの人は泣いているんだろう。

「いこう」

少年が私に言った。

一瞬、風が木の葉を揺らしてった。

「うん。」

「菜月！ 菜月！ 居場所ならあるんだよ！ なつ……き……」
最後の方は嗚咽混じりでよく聞こえなかった。

最終話 崩落

階段をのぼりきろうとした時、不意に声が聞こえた。

「独りは怖いよ」

母の震えた声。

「――おかあ、さん？」

思わず振り返った瞬間、階段がバラバラと崩れだした。
足場を失った体は前方に大きく傾ぐ。

何もかもがやけにスローで動いてる様に感じられて。

階段の欠片の間から、少年の薄く笑みを湛えた顔が見える。

何で、笑って……

そのまま、あたしは意識を失った。

――セミの声が聞こえる。

目が覚めると、あたしはあの神社の狐に供えられた、大量の彼岸
花に埋もれていた。

空は昼間の色をしている。

立ち上がって周りを見たけど、もう少年は居ない。

少しの間、あたしはそのまま立ち尽くしていた。

意識を失う直前、リビングで泣いている母の姿が脳裏によぎった
気がする。

残像がこびりついて離れない。

「あ、電話」

そこで初めて、自分の携帯がさっきからずっと鳴っていた事に気付いた。

ディスプレイには『母』の表示。

「もしもし」

『菜月ちゃん？』

「お母さん？」

『今からお母さんもおばあちゃんの家に行くから』

「へ」

突然の言葉に思わず聞き返す。

『菜月ちゃんが狐に連れて行かれちゃう夢を見たの』

「なんだあ、ただの夢じゃん」

少しどきつとしたのを隠して、私は笑って言った。

『うん……。でもね、それでお母さん反省したの。今まで菜月ちゃんとゆっくり話す事なんてなかったなって。これじゃあ連れて行かれても文句言えないじゃない。だからこの機会に色々話したいの』

「そうだね。あたしも色々話したい」

『うん、じゃあ、また後で』

ああ、こんなに簡単な事だったんだ。

ただ話し合えばいい、それだけの事。

目頭が、少し熱い。

今夜は三人で沢山喋ろう。

あたしは夏の暑い日差しを体に受けながら、玉砂利を蹴散らして神社を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9130h/>

そして闇に消ゆ

2010年10月8日15時31分発行